お岸さんと清さん

水野　仙子

一

お岸さんのお父さんと清さんの兄さんとは同じ醫者(いしや)で、村を隣り合つてお互に仲善くして居ました。或時其郡内の醫師組合に會合があつて、二三里離れたKといふ町に集まらなければならなかつた時、丁度十六だつたお岸さんは、そこの親類に泊りに行くといふので、お父さんと一所に出掛けることになりました。其親類にはお岸さんの從兄達が澤山にゐました。さうして清さんは又其一人の從兄のお友達でした。

お岸さんは至つて我儘な、其癖ちつとも憎氣のない剽輕(へうきん)な少女でした。誰しも餘りの我儘さに一寸腹を立てゝ見ても、心(しん)から怒る事は出來ないで直ぐに笑はされて了ひました。お岸さんには兄弟が澤山にありましたが、お父さんは一番此お岸さんを愛してゐるやうに見えました。お岸さんは時によると人のいゝ兄さんまでも弟扱ひにして一人で威張つてゐました。誰も此小さな暴君の前には笑つて被征服者となりました。

さうして此無邪氣に高慢な女王は又誰からでも可愛いがられる徳を持つてゐました。お北さんといふのはお岸さんの異名(あだな)で、何事にも北向きだといふ所から誰がつけるともなしにつけた名なのです。お北さんと呼んでもはあいと濟してお岸さんは返事をするのでした。

お岸さんがかういふ調子で親類の家で遊んでゐるうちに、會が濟んで一人歸路についたお父さんは、薦められる儘に清さんの兄さんの家に立寄りました。さうしてお酒のあとで常から可愛いがつてゐた清さんの部屋を何氣なく覗いて、「どうだい勉強が出來るかね。」と云はうとすると、部屋の中に主はなく、「あ、留守だな。」と思つて其儘引返さうとしたお父さんは、ふと机の上に散らばつてゐた紙片(かみきれ)に目がとまりました其處には今の今まで誰かゞ坐つて居て、何かしら物思ひに耽りながら夢中に書き散したものらしく、書いては消し書いては消しゝてあるので、ふと好奇心の起つたお父さんは猶も近づいて其紙片を覗き込みました。するとそれは思ひ掛けなくも自分の娘の名前で、岸子〳〵といふ字が無數に書いてあるのでした。或は自分の姓と岸子といふ字を結びつけたり、又は自分の名前をお岸さんの姓の山本といふ字の下に書いたりしてあるのでした。お父さんは人知れず微笑まずには居られませんでした。自分の可愛い娘を思つてゐる者は又常に自分が目を掛けてゐた青年なんですから、全くお父さんには思ふ壺だつたのです。其時からお父さんは清さんの戀の隱れた保護者でした。

併し其事は當の清さん初め誰も知つた者はありませんでした。其年は何事もなく暮れてお岸さんは十七

清さんは十九の春が來ました。清さんは中學を優等で卒業して猶引續き高等學校に入りたい希望だつたのですけれど、少し遣りかけてゐた事業に失敗した兄さんは、もう是からの學費を出す譯には行かないときつぱり申渡しました。清さんは兄さんを怨んだり泣いたりして猶願つて見ましたが、一旦さう言ひ出した兄さんはもう頑として聞入れませんでした。そこで清さんは考へました。今はもう高等學校など〻先の長い事を望んだとて仕方がない、僅か二年か三年かで濟む專門學校ならば、幾ら兄さんでも許して呉れるに違ひなからうと。さうして兄さんには無斷で願書を出して試驗を受けました。所がやがて入學を許可する通知がまゐりました。清さんは今度こそ追引ならず兄さんを説き伏せる積りだつたところが、意外にも兄さんは却て清さんの其執着に腹を立て、自分勝手に試驗を受ける位ならば、それだけの目算があつたのだらうから、此後ともに自分勝手にするがい〻と言ふのでした。清さんは途方に暮れて了ひました。さうしてすつかり凋れかへつてお岸さんのお父さんの所へ相談をしにやつて來ました。

お父さんは一分始終を聞いて暫く默つて考へてゐました。やがて一言、「よし、俺が引受けた。」と言ひました。「學資は俺が出してやる。」

見る〳〵清さんの目は輝きました。併しお父さんはいつもの綻びやすい口許を今日は珍らしく眞面目に引緊めて「併し……」と言ひかけました。

「併し、俺と君の兄貴は幾ら仲のい〻友達だからといつて、俺から學資を貢ぐといふのは餘り穩かなことぢやない。俺はじめ若しそんな場合兄貴の立場だつたら少し面白くないからねえ。そこでいつそのこと君を君の籍ごと貰つてしまはうと思ふんだが？」と餘りの事に吃驚して顏を擡げた清さんの眼をお父さんは凝乎と眺めました。

清さんはお父さんの眞意を圖り兼ねて再び疊に目を伏せました。異存のあるべき筈はないがと言つてゐるやうな其目に、何だか胸の秘密をあばかれるやうな氣がして、清さんは其事の善し惡しの判斷どころか唯々お父さんの意中についてあれこれと思ひ惑ふのでした。

「若しそれに君さへ異存がなければ、俺は是から直ぐに兄貴の所へ出掛けやうと思ふんだが？」とお父さんは再び清さんの返辭をうながしました。けれども清さんはさう言はれ〻ば言はれる程、益々體が硬ばつて了つて口が利けなくなりました。

「實は……」

清さんは思はずひやりとして、何でもい〻からもう其後は言つて呉れない方がい〻と思ひました。けれども遂々さう思ふ間もなく、お父さんの一言々々につれて、清さんの體中の血は俄かに逆環りを初めるのでした。可哀さうな程眞赤になつた清さんは、丁度斷頭臺の下にでも引据ゑられた樣に、不思議な觀念をして小さくなつて坐つてゐました。お父さんは醫師組合の會合があつた時の事から、行く〳〵は清さんをお岸さんの養子にする積りでゐたことを打明けました。

其時は何が何だか夢中だつたと後で清さんは語りました。清さんがさうしていよ〳〵お岸さんの家の人になると云ふ事を聞いた時、お岸さんは只一言「ふん」と言ひました。それから間もなく清さんは山本清となつて仙臺の學校へと發つて行きました。お岸さんも亦其年は一つ橋の職業學校に入る爲めに東京に出ました。

二

かうして離れ〳〵に修業には出てましたけれど、清さんがお岸さんを思ひに思つてゐる念は片時も止む間がありませんでした。其思ひは自づと熱の様な文字になつてお岸さんの手許へと遙々書いて送られました。けれど清さんが自分の家の籍に入つたことが格別自分に關係のある事とも思つてゐなかつたお岸さんには、さういふ清さんの仕打ちが何ともいへず圖々しい厭な汚ならしい感じを起させるに過ぎませんでした。

それにもと〳〵餘り清さんを好いてなかつたので、餘計煩い迷惑な事に思ひました。くしや〳〵に其手紙を丸め込んではみんな便所の中に捨てゝ了つて、其日は一日機嫌の惡い日を送るのでした。

夏の休みや冬の休暇には、　村の山本家に澤山の書生連が集るのが常でした。それはみんな此處の兄弟の學校友達や何かで、勿論お岸さんは其中の女王でした。其女王の前に清さんは特別に柔順で、そして特別に物優しく親切に振舞ひました。さうして此女王はまた特別に清さんには意地惡く我儘なのでした。

辛い嬉しい休暇の間にいろ〳〵復雜な思ひを經驗してお岸さん達よりは二三日早く發つて行く清さんを外の兄弟達と一諸に村端れの池のほとりまで見送る（それがお客様達を送る兄弟達の習慣でした）お岸さんは、「左様なら！」「御機嫌よう！」などゝいふ別れの言葉の代りに、「アーメンくちや〳〵おつちよこちよい！」などゝ云つて逃げかへるのでした。清さんはよく聖書を愛讀して居ましたのに、そんな宗教臭い事がお岸さんはまた大嫌ひだつたのです。さうして唇を嚙みしめて一人とぼ〳〵と村道を歸つて行く清さんをちつとも氣の毒だなどゝは思はないのでした。

暫くすると池の堤の上にお岸さんは駈け上つて、「清ちやアーん」と苦勞もなさゝうに澄んだ聲を張りあげて、うなだれて行く清さんの寂しい顏を振りかへさせるのでした。

「清ちやアーん」とまた外の小さい兄弟達も聲を合せて叫びました。

「一體どつちを自分は信用したらいゝのだらう　」

これがさういふ時の清さんの苦しい謎でした。

絶え間ない思ひは絶え間ない音信となつて運ばれました。其思ひは年と共に熟し、離れては殊に床しく過ぎて見れば辛い其仕打ちもたゞ〳〵懷しく偲ばれるのでした。戀する心が強くなればなる程、對手を專有したい望みが強くなつて、總ての事に幾らか遠慮氣味であつた清さんの要求は段々力強くなつて行きました。お岸さんの周圍、お岸さんの擧動、お岸さんの心、それらをすつかり自分のと一致させなければ堪

らないのでした。かうして清さんのお岸さんに對する態度は段々壓迫的になつて行きました。さうしてお岸さんの心が其爲めに却て外れゝば外れる程益々それが募つて行くのでした。

お岸さんには全くそれが厭味の骨頂に感じられました。今迄は兎に角一家に起き伏しゝなければならないと云ふ事の爲めに、いゝ加減にあしらつては居たものゝ、堪らなくなつたお岸さんは遂々ぷん〳〵しきつて手強い手紙を書きました。自分と清さんとは依然として赤の他人であるべき事を。たゞ清さんの境遇に對する父の同情から義兄の關係になつてゐることを。だから何處迄も義兄と義妹の關係を續けなければならぬ事を。今後猶若し此義兄妹の關係から内へ一歩でも踏み込む時には、斷然自分から絶交を申出るべき事を。全くお岸さんは大眞面目に威丈高になつてかういふ手紙を書きました。

所が折返して届いた清さんの返事には、お岸さんの其子供の様な威張り加減が却て可愛くこそ思はれたけれど、傲慢な無禮な文字も決して自分の愛を傷けはしなかつたと云ふ書出しで、何も彼も細々と委細の事が書いてあるのでした。さうして二人がやがて婚姻を結ばなければならぬのは自分一人の願ひばかりではなく、又、父さんの意志でもあることを諭す様になだめるやうにもの優しく書いてあるのでした。

それを讀み終つたお岸さんの顔は眞青になつてゐました。今の今まで嘘だとばかり思つて居た事が――之までにもちよい〳〵さういふ噂さはお岸さんの耳にも入りました。時には面と向つて貴女の許嫁の人は…などゝ話しかけられたりしましたけれど、お岸さんはきつとそんな時に怒り出して了ふ程さういふ噂さを厭がりました。さうして清さんが入籍したのは單に學資の都合からで、お父さんは實にさういふ義侠心を常に持つてゐる人である事を吹聽するのでした。さうして其事の爲めにまたお岸さんはお父さんを尊敬し滿足を感じてゐたのでした――事實であつたといふことは、おまけにそれが自分を誰よりも可愛いがつてゐる筈のお父さんの心から出てゐるといふ事は、此上もなく忌々しい口惜しい事なのでした。之まで何一つ自分の思ひの儘にならぬ事のなかつた我儘なお岸さんにとつては、それは全く忍ぶ事の出來ぬ屈辱でした。

「死んだ方がよつぽどいゝ！」とお岸さんは輕く口に出して呟きました。すると不思議にも其言葉に魔が魅つたのが、我儘な反抗心や絶望やが一時に強く燃えたつて、死ぬといふ事がさほどむつかしいことでも悲しいことでもないやうに思はれるのでした。

其夜一晩たゞ〳〵清さんの強い執着から遁れる方法を考へて見ましたけれど、如何してもそれは遁れられぬ運命である様にお岸さんにも思はれました。すると又一方から死と云ふ考へが頭を擡げて反省力を失つてゐる心を誘なひ、さうして恐ろしいことには其死だけがお岸さんの現在の要求を滿足させるらしいのでした。眠るともつかず覺めるともつかずに夜を明したお岸さんは、夢の仕業のやうにすつかりもう自分は死なゝければならぬ身であるやうに思ひ込んでゐました。ふら〳〵と起き上つて机の前に座つたお岸さんは、此世で只一人愛し愛されるお父さんに最後の手紙を書き殘し、それを持つて丁度夢遊病者のやうに

寄宿舍の裏門を脱け出しました。

朝も未だ早い頃で、析から秋口に向つてゐる冷氣が霧深く街を閉してゐました。いつものポストの前まで來習慣的に立止つたお岸さんは、自分が今何をしてゐるかも意識することなしに其手紙をほうり込んで了ひました。と殆ど同時にガタンと強く一廻りしてばつさりと手紙は中に侘しく落ちました。其途端初めてはつと我にかへつたお岸さんは、もう取返しのつかぬ事をして了つたのに氣がついて、いよ〳〵自分は死なゝければならないのだとはつきり心に思ひ泛べました。けれども亦同時に、何も今日是非といふ程せつぱつまつた事でもなければ、さて如何して死なう？何處で？と云ふやうに初めて具體的に考へて來ると自分で自分が何かに魅られて居たのに氣がつくのでした。其心はまた瞬間の早さで手紙が届いた時の家中の驚きを想像しました。と此時思ひ掛けなくも二つの面影があり〳〵とお岸さんの胸に泛んで見えましたそれは實にお岸さんの親愛なお父さんと、そしても一人――は眉の濃く迫つた淺黒い顏色の一人の青年の面影でした。

お岸さんはハッとして立竦んで了ひました。けれども其刹那に、浸み込んで來るやうな人戀しさの思ひが、生れて初めての味はひをお岸さんの胸に漂はせました。さうして其經驗はいよ〳〵お岸さんの心を死から生の方へと引戻すのでした。

三

其翌日の夕方取るものも取敢ず出京したお父さんに連れられてお岸さんは田舍に歸りました。あの朝折よく近所に住んで居る友達が通りかゝつたので、思はずあつとして泣き出したお岸さんは、早速其友達の母親の行届いた世話で、お岸さんが無事で歸るといふ電報が國許に打たれたのでした。

其日の事があつて以來、お岸さんの胸には絶えず一つの面影がちらつきました。今の今まで無意識に牽かれて居た心の綱が、今は明かにしかも自ら進んでひかれようとして居るのでした。お岸さんは間もなく自分が戀といふものを知つた事を知らなければなりませんでした。しかもそれは意地惡くも清さんの幼な友達で、現に今も親友であり、所も同じく仙臺の高等學校に行つて居る人なのでした。

思はれて居る身が他を思つて居る場合の苦しさ、さういふ思ひを染々とお岸さんも感じるやうになりました。けれども我儘な本性は飽く迄も清さんを嫌つて、否、自分が其爲めに苦しめば苦しむ程嫌惡の情が募り、自分の戀の悲しい片思ひに侘しく獨り諦める時、益々清さんが增く厭はしくなつて來るのでした。さうして人知れぬ惱みのあとのふとした機會から、Kの（お岸さんの戀人の頭文字）意中を知る事の出來た時、にお岸さんが清さんを嫌ひ憎む心はもはや絶頂に達しました。

圖らずもKも亦以前から、お岸さんが小學校通ひの時分からたゞならぬ思ひを祕めて居たのださうでした。けれどもそれが人を戀ふるといふはつきりした心になつて來た時には、兼ねてから親しい間の清さんがお岸さんを戀ひ初めた時分なのでした。敏感になつてゐたKの心は直ぐにそれを感じ、そして苦しみま

した。けれども或時何にも知らぬ清さんが其友を信用して其胸のうちを打明けた時に、Kは自分の思ひを犠牲にすべく密かに覺悟をしました。さうして幾年幾月、我から求めて失戀の寂しさに泣きながら友達への義理を守つて來たのでした。併しそれがどんなに辛い努力であつたか？未練がましくはあるけれども、此事だけは此最初であり最後であるべき筈の手紙に書き入れることを宥して頂きたい――こゝまで慄ひながら讀んで來たお岸さんは、其時もう堪らなくなつて泣き伏して了ひました。さうして體と心の全體を擧げて清さんを二人の美しい夢の邪魔者として呪ひました。

恰も死に瀕してゐる子供を呼び覺す母親のやうに、お岸さんは吾を忘れて筆を取りました。愛も憎みもありのまゝに、呪ひも誓ひも目茶苦茶に、假令天地がひつくり返らうとも決して清さんの妻にはならぬことを繰り返し〳〵書き込みました。さうしてあらゆる言葉の限りを盡して清さんを呪ひました。

お岸さんはそれで幾らか胸がすいたやうな氣がしました。殊には自分が密かに思つてゐた人が、また自分を人知れず思つてゐて呉れたといふ事が、藥よりも何よりもの利き目があつて、田舍に歸つてから一と月近くも毎日〳〵すね氣味な不機嫌で暮してゐたのが馬鹿〳〵しいやうにさへ思へるのでした。さうして自分から進んでまた上京しようといふ氣を起しました。

其前の日のこと、すつかり山支度をしたお父さんは、これから持山に茸狩りに行くからお岸さんにも蹤いて來るやうにと言ひつけました。お岸さんは何氣なくついて行きました。するとお父さんはいつになく道々村の話や田地田畑の事などを委しく話して聞かせるのでした。やがて間もなく持山に入ると、お父さんは先づ其中の一番高見にのぼつてお岸さんを自分の傍に立たせました。さうして持つてゐた杖をあげて山本家の所有地に就て遙かな目印を指し示すのでした。それはどんなに遙々と廣くあつたでせうか。今迄さういふ事には一向無頓着であつたお岸さんも、今更に滿足の目を見張つて其杖について周圍を眺め廻しました。

其夜お岸さんは更めて人氣のない奥のお父さんの部屋に呼ばれて、初めて凡ての事が直接に打明けられました。

「お前に一應話して見なかつたのはお父さんの手落ちかも知れないが、併し其頃のお前に善し惡しの分別があらう筈もなし、又あつたにした所でそれは分別ではなくて只の好き嫌いといふものだ。お前はもう十九にもなつたのだから少しは分別がなければならない筈だ。よくまあ考へてお呉れ、兄さんはあの通り病身の體で、俺が死んだ後此家が持ち切れるかどうかと實は氣遣ひでならないのだ。さればといつてなまなかの後見人を立てゝ人のいゝ兄さんが馬鹿にされる樣な事があつては、俺は死んでも死に切れないではないか。此處の所はどうか一つお前にしつかり覺悟をして貰つて、兄妹がお互に援け合つて賴み賴まれ、さうして御先祖の名を辱めないやうに山本の家を守つて貰ひたいばつかりに、俺は清をお前の養子に決めて置いた。それが兄さんの爲めにも亦お前の爲めにも清の爲めにも、ひいては山本家の家族全體の爲めに

なることなのだ。お前の分として俺は晝間見せたあの山を取つて置く積りである。だおうかお父さんの心持ちを察して呉れたら、清が厭だの嫌ひだのとそんな我儘は言はないでお呉れ。」

お父さんは賴むやうに諭すやうに言ひ聞かせました。

今初めて其本心を知つたお岸さんは。今の今までお父さんが單にたゞ清さんに同情して物好きにも自分の意志を踏み躙つてゐることが怨まれてなりませんでしたが、家の爲めに兄の爲めに、又自分の爲めに計つて呉れる親心が染々有難く感じられました。それと同時に今まで知らなかつた責任の重さが強く暗く胸を壓しつけて、實のところ親の慈悲が却て迷惑にすらも思へるのでした。殊に清さんと婚禮するといふ事は、どんなことがあつてもお岸さんには我慢の出來ないことでした。假令打たれても叩かれても、よしんば親子の縁を切られてまでもと思ひ込んだ厭さは、片つ方にお父さんの立場に同情したり、心から自分の我儘が濟まないと詫びる思ひと反比例になつて、寧ろさういふ思ひが強ければ強い程飽く迄も厭さを通さうと我を張りました。

寂しい里の夜はだん〳〵と更けて行きました。お父さんの聲は疲れて曇り、果ては手をつかんばかりに賴むのですけれど、お岸さんはたゞ固くなつて「厭です！」とばかりヒステリツクに叫ぶのでした。其餘りの強情に呆れて叱る氣力も失せたやうに、お父さんは涙を泛べた目を据ゑて凝乎とお岸さんの顏を見つめてゐました。

と、宿靜つた夜の森閑とした外に、とん〳〵と表門の戸を叩く音がしました。親子はふと耳を欹てました。何處かに急病人が出來たのだらうと誰もさう思ひました。今まで次の座敷におろ〳〵と寢もやらずに話の模樣を氣遣つてゐたらしい母親は、戸口に近づいて中から聲をかけました。

「何誰です？」

續けざまに叩いてゐた音はふと止んで、

「仙臺から清が歸つてまゐりました。」といふ聲が冷たく濟んで聞こえました。

お父さんとお母さんは顏を見合せました。お岸さんは思はず知らずはつとして顏色を失くしました。何かしらもう遁れられぬ破目に陷つたことが感じられて、それに反抗する力がへと〳〵になつて了ふと共に全く精神が強烈な毒氣に摩痺させられてしまつてやうな氣がしました。

秋深い夜の空氣に刺されて來た爲めでもありませうが、清さんの唇は紫色を呈して顏は眞靑になつてゐました。誰でも其顏を一目見たら、何かを強く決心してゐることが知られたでせう。お岸さんは一種の恐怖に打たれて立竦みました。

「突然歸つてまゐりまして……」と清さんはがつくりと無骨な手をお父さんの前に突きました。「僕はもう併し仙臺には歸らない積りで戻つてまゐりました！」

さういふうちにはら〳〵と清さんの目から涙が溢れました。「之を見て下さい！」と外套のポケツトから

引出してお父さんの前に置いたものを一目見ると、お岸さんはハツとして血が逆だちました。それは實に先達てKに書き送つたお岸さんの手紙だつたのです。

併し直ぐ又清さんは思ひ返したやうに、「いや、こんなものはお父さんにお目にかける必要はないかも知れません、岸さん！……」と正面に見ずに其聲は顫ひました。「これは貴女にお返しゝませう。僕は知らなかつたんです、ちつとも知らなかつたんです。勘忍して下さい！　なんにも知らなかつたんです。僕は諦めます、K君は何も僕に義理をたてるには及びません、僕はK君には非常に世話になつてゐます。僕さへ……僕さへ諦めれば濟むことなんですから、僕は思ひ切ります、えゝお父さん、思ひ切ります！」

清さんはもう其後を言ひ續けることが出來ないやうでした。お岸さんも亦其上を聞くに堪えられませんでした。涙に目がくらんで人の顔を見分けられない中に、お岸さんの無言の怨みや絶望や――しかもそれらの感情を押へてお岸さんの爲めに道を讓らうとする愛――を初めて身にしみて感じました。さうして清さんはもう明日と云はず直ぐ此場から此家を去る決心でゐることを直覺しました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今清さんとお岸さん大變仲よく暮してゐます。清さんは醫學專問學校を卒業後町に出て開業をして相當に患者もあり、二人の間には男の子も出來ました。今ではお岸さんはこんなことを言つてゐます。「命にかける程の好き嫌ひだつて一向當てにならないものね。たゞ嫌ひだ〳〵つて言つたつて、それにちつとも根據がないんだもの、つまり喰べず嫌ひなんですね。」などゝ。

【入力者注】

底本は総ルビですが、ルビは一部のみ残しました。

底本と改行を合せるために、一部フォントサイズを小さくした箇所があります。

散見される誤字・脱字は、底本のままにしました。

初出：底本：「青年」大正五(1916)年一月
テキスト入力：小林　徹
公開：令和五(2023)年三月二十三日
リンク：水野仙子ホームページ

【謝辞】底本コピーをご提供下さいました菅野俊之様に厚く御礼申し上げます。